Kazé

ルヴァン便り No.5
2013.7.10

西村伊作は大正デモクラシー期を代表する文化人の一人です。
彼は日本人の生活の改善や教育・住宅の改革を説き、当時の人々から熱い支持を集めたのでした。
大正10（1921）年には与謝野寛・晶子夫妻らの協力を得て、東京に文化学院を創立し、自由でのびのびとした教育を実践しました。
又同年、西村建築事務所を設立し、数多くの家族本位の住まいを建築したのでした。彼の活動はいずれも、昭和戦後の教育やすまいの先駆けとなっています。
彼にとって軽井沢は縁の深い避暑地です。
文化学院が芽生えたのもこの地であり、又旧友で後に浅間高原教会の創立牧師となった沖野岩三郎ともこの地で親しく交流し、外国人宣教師らの住まい方を高く評価し、自らの生活改善に取り入れました。
さらにこの地で彼の理想を具体化した興味深い作品を残しています。
我が国近代の教育史や住宅史に大きな役割を果たした西村伊作の軽井沢での足跡をたどります。

西村伊作の建築を訪ねて　その5　　板垣鷹穂別荘　1934(昭和9)年

軽井沢･六本辻の近くの森の中に板垣鷹穂別荘は静かにたたずんでいる。木造平屋のその別荘は、今日のそれらに比べるといたって簡素であるが、正方形に近い桟で区切られた硝子建具を多用した姿はモダンである。
この別荘を建築したのは板垣鷹穂(1894～1966)。板垣は戦前、美術史家･美術評論家として活躍し、戦後は早稲田大学教授を務めた。板垣自身によると概略の設計は自分で行い、実施に当たって西村伊作の長男久二が担当したという。
西村は1921(大正10)年、文化学院を創立するとともに建築事務所を開設し新時代の住宅を多数手がけた。昭和初期には長男久二が米国で建築を学び帰国し事務所を手伝っていた。板垣別荘はその頃のものである。
別荘内には庭から直接リビングに入る形式。そこは南に面し石積みの暖炉があり、長雨の時などは夏でも薪を焚いたという。その左手に和室が二間。北側には台所、洗面室、浴室などがある。築80年経過しているが適切な管理のためか老朽感はなく、往時の姿をよく遺している。なお、竣工時には書斎はなかったが、翌年別棟として増築された。
別荘内部の写真は筆者が撮影していた際、板垣の孫・竹内氏の飼い猫が偶然写真に収まったもの。板垣は無類の愛猫家であったというから、これも何かの縁である。

秋色の板垣別荘
（竹内務氏撮影）

伊作の欧米旅行日記（4）

伊作が乗船したドイツの商船ルドウィッヒ号は、1909(明治42)年3月27日、横浜港を出帆した後、長崎・上海・香港・シンガポール経てコロンボに4月18日入港した。今回の伊作旅行日記4回目は、コロンボを出帆し、アラビア半島の南端アデンを経て紅海を北上、スエズ運河を通り地中海沿岸のエジプトの港ポートセイドまでである。
（句読点は筆者による）

●1909(明治42)年4月20日

天気は毎日よろしい。今晩ダンスがあると掲示が出た。
コロンボから□□ノ若い人が乗つた。英国へ医学を研究に行くのだと云う。
子供が多数である。彼等は大人の食時前に子供計りの食事をする。此の時は母親かアマ又はアヤと称する□□のもりと共に食卓に付く。そして守りも食べれば子供も食べる。中々面白い会食である。そして子供は実にきれいな色の白い顔で□□は□□の事とて褐色乃至栗色である故、色の対が面白い。子供は多く□□の語を話す。英語は大分大きな子であ□らねば話さぬ。英国人の親子がマレイ語で話をして居るのは面白い。
海豚の群が海上波を立てて跳りつつ過去たのは唯一の見物であった。
夜の九時から舞踏をやつた。二等と一等との間の甲板の廣いところでやつた。色々の信号旗等国旗を引張りまはし赤青の電灯でイルミネーションをなし、甲板には粉をふりまき楽隊の曲によつて踊る。自分は舞踏が一寸も分からぬ。ただ彼等男女がだき合つてくるりくるりとまはつて居るのを見るだけで、レモン水をのんだり菓子をたべたりして居るのみだ。ある人が一等国の人は舞踏をせなければいかぬと云うた。一等国と日本を称ぶのは少しからかつて居る調子がある。穴がち日本が一等国であると云はれてもよろこぶ可きでない。
コロンボから乗った人は両腕一面にほりものをしたのがある。得意になつて見せて居つた。日本人のほり師に四十□出して四ヶ月かかってやつてもらつたのだと云ふ。金もちの放蕩むすこであるらしい。□□けば法律家で彼の家は代々法律家の階級であり祖先は土人即ちシンガーリースであるとの事である。

●4月21日

海は相かわらず静かである。丁度油のタンクの中□の様なものだ。乗客は船の一夜に走る哩数をあてるかけを行ふて居る。一円位かけて勝つたもの一即□一番近き哩数を云ふのから次へ次へと五人位が金をもらふ仕けである。
夜、海の水が船の為めに波を起した所できらきら光るのを見た。燐光である。

●4月22日

朝二等の甲板で運動会の様な事を初めたが、小学校の生徒のする競争をきやつきややつて居る。世話やきのオランダ人が何や色々□□して居る。
独逸人で日本に少しの間居り日本の宿に止まり日本食を食ひて日本の生活をよく研究して居る人もあり又英国人でしばらく日本の土地に止まりながらホテル以外に何の知識なき人も居る。同じ時間を費し同じ金を費しても□□力の有無によりて甚だしき違い□□める。
少し波が出てきた。あまり静だと少し波でも出て来れば面白いがと思ふたけれど、少しでもゆれると気分がよくない。夜音楽会をやつた。二等の人の催しである。

●4月23日

二等に居る日本人Dr某が学者を尊敬せよと仰せられた。我輩は彼等学者たちを畏敬せなかつたと見へる。
船中は上下不差別で一家内の様に実に心易くなるものだ。日本に居て一かどの学士であると思ふて居たものが、船中で吾輩の如きものに友人の如くされるのは心よくないと見へる。アフリカの岬角を左舷に見る。岩計りの焼けたる如き山、日光を受けて□色にきらめく砂。何となくものすごく雄大にかんじる。

●4月24日

朝九時頃アデンに着いた。アデンは平地ならんと思ひの外、岩計りにて成れる大きなる山を□へて居る。実に岩計りの山である。褐色をなしたる岩の大□が天に向て鋸の歯を立てたる如し聳ている。其形我々が想像せし如き普通の山に非ず。奇なりと云わんよりも物凄き□くある。一点の緑をも見る能わず。今溶炉より□出された如き感がある。其方には無限に平に見ゆる砂漠を□へて居る。其海岸には少しの青き植物あるが如くに見ゆる。雨なく水なく木なき土地である。真水は海水を蒸留□□なりと云ふ。こんな所へよくも住んでんで居られたものと思ふ。三時間計りの後に港を出た。アフリカ人がオストリッチの羽毛や卵や土人の製した□や□□エジプト巻煙草を売りに来てやかましく云つて居た。駝鳥の卵は高価なものである。
夜になつて紅海に入った。紅海は地図で見ると細長い海である故□□両側が手に取る如く如く見ゆるであろうと□も一寸考へるが来て見ると中々大した大洋である。
コロンボ産の若い男（両腕にほりものある）が夕食後□彼の失意□をした。彼はイタリア産の女を見そめた。それ灰色の目に金の髪眉毛はやし黒きエンゼルの如き美しいものであつたげな。彼は彼女を愛し、彼女も彼を思ひ居た。彼は一夜彼女に暖かき□を□り□に□かき□に□をした。彼は彼女と結婚せん事を親に願つた。

彼等の親はそれを聞入なかつた。そして彼女が最もおそれた彼女の信ずるカソリツク教の僧の反対であつた。もし無理に結婚したならば、彼女の家は教会より破門せられるのであると云ふ。女は此のために終に欧羅巴へ送られた。男は失意の為家に止まる事□はずして欧州へ旅行に出かけたのである。親が子に干渉するのはどこも同じ事であると見へる。

●4月25日

新嘉坡（シンガポール）から乗つた客が朝早く汽船から身を投げたと云う事を聞た。彼は彼の妻と子とをなくした人だと云ふ。人生を悲観して自殺したのであらう。西洋人でも同じく自殺をやると見へる。

●4月26日

午後二時半から二等の食堂でお茶をよばれた。良人は友田さんである。外に佛教を日本で研究して居た独逸人夫妻及二人の女（共に日本は長く居た）が客であつた。日本の煎茶を日本の食器で味つたのである。一寸□らしくて面白かつた。彼の独逸人の子は日本で生れて名を桜子と云う。一人の女は日本語を話す事日本人と変りない位である。

●4月27日

紅海に入つてより、逆風が強く吹く。そして気候が大分冷しくなつて夏服で風に吹かれると少し寒い。ちよいちよいと船に出□ふ。遥か沖合に薄影が見へる。見て居る中にだんだん船が見へだんだん大きくなつて我船と行会ふ。又見て居る中に小さくなり見へなくなる。沖合のかすかに見ゆる船が舷側へ来る迄何分かゝるか計つて見たら十分間で○に見江なかつたのが真横に来た。時々アフリカの山がかすかに見ゆ。

●4月28日

朝未明にスエズ着。起き出でて見れば港内に在り検疫医（女医）来り、食堂に皆を集めて一人一人名をよび医者の前を通つて出る。それでよい□。十時頃出帆。いよいよ運河に入る。スエズは木の少き町である。四方どこも砂漠で見がま□。運河は巾やうやく船の巾の二ばい位、思ふよりせまい。両岸はほつた砂をつみあげて居るので土手になつて居る。船は出帆の速力で通る。他の船に行会ふと一つがまつて居る。四隻の船の通るのを我船は二時間もまつた。日中であつて両岸の反射で実に暑かつた。スエズから商人が船へ乗込んで甲板で□□を売つて居る。砂漠に駱駝の通のも見えた。雨の少ない所とて両岸に塩がわ来て真白に見ゆる。雪の降つた様である。浚渫船がいつも所々でほつて居る。運河の所々に船を家に拵へたのを浮べてそれに技師の一家族が生活して居るらしい。船が通ると女子供が出で来てハンケチを振つたりする。砂の他見るものがない。夜に入つても矢張り運河の中を通つて居る。砂が月に白く光つて雪の様だ。

●4月29日

朝未明。石炭を積み入れる音に目がさめた。ポートセイド（Port Said）に入つて居るのだ。ここも上陸するひまがない。ボートに男女三四人乗つてマンドリンやギターを弾き、面白いはやり歌を歌ふて銭を乞ふものが三四隻、船のぐるりに居る。金を投げてやるとかうもり傘でうける。これはエジプト人でなく欧州人である。ここから又数人乗込んだ。

朝食前に船は出帆した。我船室へスイツル人が入つた。若い男である。だんだん冷しくなつた。夜になつて甚寒く感じた。二階の□□室にて子供にからかつたらル、オラン、チナと云ふて大いに排斥をする。これはマレイ語で、お前は支那人だと云ふ事だ。シンガポール迄に居た西洋人の子は支那人を軽侮するくせが付いて居るから我ら日本人をも同じ軽侮の中間へ入れる。

スエズ港（参考写真）

2013年度　ルヴァン美術館のご案内

6月8日（土）～11月4日（月）　2013年
１０：００～１７：００
水曜日休館（7月15日～9月15日は無休）

常設展：「西村伊作と文化学院の芸術家たち」

1920（大正9）年、西村伊作は理想的な学校を創る夢を持って、信州、軽井沢で与謝野寛、晶子夫妻、石井柏亭、赤城泰舒、河崎なつ達と話し合い、翌年、東京駿河台に自由と芸術の教育を求め、文化学院を開校しました。彼らは自分の子供達の教育の為に、当時の学校教育に飽き足らず思っていたからです。
当時の第一流の学者、芸術家達が親しく教え、職業的な教師にはよらない、高踏的な人間教育がなされました。文化学院の教育は、芸術的な雰囲気が豊かで、教師には画家が多く、又作家、評論家など文学者の教師が多く教えていました。1924年大学部に美術科が設けられてからは、さらに個性的な画家たちが指導するようになりました。
佐藤忠良をはじめ、脇田和、硲伊之助、荻太郎、村井正誠などが実技を教え、今泉篤男、西田正秋、高階秀爾などが美学、美術史を講じました。
今回は、伊作の元に集まり文化学院で教鞭をとった、後期の芸術家達の作品を展示致します。

企画展：「世界人としてのライフスタイル　西村伊作 と 避暑地 軽井沢」

～ 文化学院・沖野岩三郎・一匡邑・草軽電鉄・西村別荘 ～

暑さを知らなくて、便利で、質素で、清潔な避暑地としての軽井沢は、単に暑熱を避けて夏を過ごす場所である以外に、重要な徳のある所です。それはこの地が世界的生活法の練習地として適当な所なのです。
我々が一夏そこに過ごすことに依って、世界各国の人々を見、世界人の生き方とその社交の状態を観察して、我々日本人の鎖国的精神を開いて、世界人としての生活に入る緒口を得るに都合の良い所だと思います。

ローズフェスティバル - バラとお茶の会 -

10:00～17:00　　会費：2,000円（各種特典あり）　　6月29日（土）～7月15日（月）
トイピアノ コンサート（畑 奉枝 / 今久保宏美（ソプラノ））
開場 18:00　　開演 18:30　　2,500 円

ルヴァン　サマーコンサート

①ギター＆ヴァイオリン デュオコンサート（上田浩司/カレン・イスラエリアン）　8月 3日（土）
②近藤和花 ピアノコンサート　8月10日（土）
③ボサノバ/サパトス コンサート（木村 純・三四郎）　8月17日（土）
④一噌幸弘（能管・篠笛・角笛他）・壷井彰久（ヴァイオリン）　8月31日（土）
⑤「シャンソンの夕べ」塩川秀子/山崎さだみ（シンセサイザー）　9月 7日（土）
開場 18:00　　開演 18:30　　3,000円（ワンドリンク付き）
④のみ開場 16:30　開演 17:00　　⑤のみ2,000円
①④は軽井沢ペット福祉協会チャリティコンサート

秋のアートフェスティバル

スケッチ大会、体験教室（フラワーアレンジメント）　10:00 ～ 17:00　入場無料　　10月13日（日）
＊美術館展示説明会　建築史家/田中修司氏　13:00 ～　　7月14日（日）・10月13日（日）

☆カフェテラス Cafe Le Vent、ミュージアムショップ Le Ventは、常時ご利用いただけます。

ルヴァン美術館：〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢957-10　Tel. : 0267-46-1911　Fax. : 0267-46-1910
東京事務所：〒107-0052　港区赤坂9-6-14　Tel. & Fax. : 03-3401-8896　http://www.levent.or.jp